

II. 東日本大震災災害支援プロジェクト講演会

教育講演会 in 石巻 ―子どもたちの心のケア―

【日時・場所】2014年2月6日（金）15:00～16:30 大街道小学校にて

【講師 略歴】スクールカウンセラー 古林康江

本日お集まりの先生方、本当に3年間とても大変な思いでお過ごしになられて、私などがお話しさせて頂くことは誠に僥倖なことですが、本日は後方支援として係わらせて頂いたほんの氷山の一角の中で感じたことを話したいと思います。では、2つの表題に分け、第1部は災害緊急支援について、第2部は不登校について話すこととします。

中心課題は、残念ながら淡路阪神大震災の子どもの心のケア予測から懸念しつつ地域への啓蒙等々、試みたものの、大街道小学校の3回目のアンケート調査では高得点者が多くなり、宮城県（石巻市も）が不登校児童生徒全国1位となったことです。今回、ここに地域一丸となって対応策を考える良き機会を頂きましたので、是非ご教示頂き、少しでもお役にたてればと願っています。

1. 災害緊急支援について ―松本大学東日本大震災支援プロジェクトチーム（S1）―

松本大学有志によりプロジェクトチームが発足し、縁あってメンバーになりました。ここ石巻市の1年目（23年4月より）は、電気も切断され信号機も動かない真っ暗な世界を怖々来たものでした。又、公共交通機関のほとんども切断されて松本大学の車やバスで駆けつけていました。大街道小学校の校庭の隅に借りtentを張りレトルトの食糧を持参しての生活でした。後半は地域が少しずつ復旧され、校内の和室をお借りして密やかな生活の時期もありました。現在は交通機関の復旧とともに新幹線等乗り継いでアパートを借りての生活になっています。大学の車の場合は大体1日かかりで到着、10時から12時間（高速道路の復旧状態や渋滞等により）かかり、帰りは夜明けに大学に付き家路にといったペースでした。本日は、朝6時半に家を出て、乗り継ぎを重ね、14時頃到着し7時間位かかっています。

S1

松本大学東北大震災プロジェクトチーム～活動記録「3年目」～25. 4. 18～



「こころのサポート～川」
臨床心理士 古林 康江

1) 他の災害との対応例の比較

子どもの心のケア1年目は仮説として阪神及び中越等の災害時をモデルに初期時系列（S2）や仮説を立て、相談順位等設定したが、今回は、特に時系列が効かない状態でした。例えば学校の再開です。そこで先ず初期仮説（S3）からの対応をすることにし、ハイリスクを要因として人的なもの、物的な被害が大きかった子どもたちに注目してきました。

阪神大震災のときもそうですが、継続相談が必要な人たち、子どもとか家庭環境事態が厳しい子どもたちを2番目のハイリスク要因と据え、3番目が、震災後の生活環境の急変による家族関係の危機を背負っている子どもたち、それから行方不明者が家族或いは親類にいるお子さん。次に家族が離れ離れになってしまっている子ども達。それから仮設住宅でのストレス。1年目は、家庭訪問は避難所でした。被災の程度とか、生活状況の差によって、1年後、2年後、3年後になりますと他の災害時と同様に厳しい現状や環境の中で二極化やいじめのようなことも起こり、その中へ子どもたちが巻き込まれ喘ぎ。更に震災離婚増加、ギャンブル依存症、震災パブリィ、震災ラブ等々の言葉も耳にした。そこで、リラクセーションを取り入れたり、重点的に個々の子どもたちや保護者

S2

S.Cとして学校緊急支援時系列援助～心から遊ぶ(カタリシス)!!

発生	1週間	1ヶ月	3ヶ月	半年	1年
・ 震心委員会 緊急支援態勢 ・ 児童・保護者への説明 ・ 資料提供 ・ 職員研修 ・ 心身に起る変化等の説明 児童生徒保護者	・ 健康アンケート チェック1 ・ ハイリスク要因 主後確認 ・ 個別カウンセリング ・ グループワーク ・ リラクセーション	・ 健康アンケート チェック2 ・ 既知児童生徒 確認	・ 健康アンケート チェック3		
☆震心委員会。絆。意識。の振返	☆震災早期訪問：中継放送	☆サマニャン・学生団体・絆・リング	・ 振返の意識。振返代 ・ モーニングワーク ・ 振返：ところ一つに	☆社会環境への意識へ ・ 被災地での意識に促	
☆戦場音楽					

S3

1年目：仮定設定～見守りが大切な子ども達の阪神・中越・その他心のケアでの対応を基に、仮定設定を試みたが、今回は津波と言う一瞬の間に生死を分け、行方不明者も多く過酷な状況もあり、時系列対応・ハイリスク要因も修正が必要？④追加

Ⅰ. 今後支援・震災直後の急性ストレス症状は時間の経過とともに減少が予測でき、リラクセーションを試みながら見守りが大切なアンケート調査・ハイリスク要因を持つ子どもたちを探る

- ①ハイリスク要因(人的、物的被害の大きかった)の子ども達は今後支援対象
- ②継続相談が必要なケースは発達障害を抱えた子どもや厳しい家庭環境にある子ども・保護者
- ③震災後の生活環境の急変による家族関係の危機
- ④行方不明者(家族・友人・親類等身近な人)がいる子
- ⑤Ⅰ 家族が離れ離れの生活を余儀なくされている
- ⑥Ⅱ 仮設住宅での生活によるストレス～二次的な問題が出始めている
- ⑦Ⅲ 震災の程度と各々の後の生活状況の差
- ⑧Ⅳ 意識の増加

Ⅱ. 今後の課題④つ

- ①リラクセーション
- ②心のケア：上記①～④の子どもへの重点的カウンセリング
- ③校内での相談継続が必要としている子どもへのバックアップ
- ④アンケート調査の高かった子ども達を見守る
- ⑤ 家庭・学校・地域ぐるみの予防を呼びかける

・ ★予防対策～この問題を持たないよう地域まるごとの予防策を考える、各学校独自の見守りが大切な子の修正を～

(Ⅲ. 認知のバイアスへの警告(自分の身は自分で守る)～皆が実行への確認)

へのカウンセリング、全戸配布の啓蒙パンフレット等、学生の瓦礫処理、校内清掃、子どもたちへの放課後学習支援等も加え、後方からのバックアップをしました。

2) 他の災害との比較及び仮説(時系列)の訂正箇所について

他の災害支援では担当となった地域や学校を中心にカウンセリングを実施。又、アンケート調査の手伝いをし、その後の処理は地元の専門家の分析に任せる。所謂、緊急支援のみの形での参加でした。阪神・淡路は1週間、隣県の中越の震災は2週間という期間でした。現在、緊急支援対応は、県外のについては、文部科学省の緊急対応依頼が県教育委員会へ、そしてスクールカウンセラーへ派遣依頼という形式をとっています。

災害に向かう度に思うことは認知のバイアスへの警告～自分の身は自分で守るという鉄則～を是非、実行・伝承して欲しいとお願いしていることです。

今年度は3年目ということで、1年目・2年目の仮説を少しずつ訂正していました、項目の3つが5つに増えた(S4)。1つは行方不明者が多かったということ。次に、長い仮設住宅によるストレスから二次的な問題が出始めてきた。子どもたちがトイレの不安や環境から頻尿状態があったり、もう一つ、離婚のです。震災以前から不安定な夫婦関係や家族関係のあるお子様で、時系列が全然合わない事態に。学校が再開されること自体がなかなか難しかったのです。阪神・淡路の場合は平成7年1月17日だったのですが、登校が2月2日に再開されています。東日本の場合は、陸前高田市(S5)へ(文部科学省からの依頼で県のスクールカウンセラーとして)4月末に登校再開に合わせ行きました。これは陸前高田市へ緊急支援に行ったもののようですが、担当が気仙中学校と矢作小学校でした。気仙中学校は気仙川の河口で、本当に海の土手の近くで、10メートルも離れていないところに立ち、屋上には船が乗っている状態で、土手に登って対岸を見た時あの一本松が印象的にポツンと目に入ったことが忘れられません。石巻市は未だ学校の再開はしていない状況で5月の連休明けになりました。

S4

3年目考察・課題～1年目の仮定設定との比較

Ⅰ. ポイント支援：見守りが大切な子どもたちの心 3つ～5つ

- ①ハイリスク要因(人的、物的被害の大きかった)の子ども達への支援対応策
- ②発達障害を抱えた子ども達(家族をも含めた支援を)
- ③厳しい家庭環境にある子ども・保護者
- ④行方不明者(家族・友人・親類等身近な人)がいる子
- ⑤震災後の生活環境の急変による家族関係の危機
- ⑥Ⅰ 家族が離れ離れの生活を余儀なくされている→地域もバラバラ
- ⑦Ⅱ 仮設住宅での生活によるストレス～二次的な問題が出始めている
- ⑧Ⅲ 震災の程度と各々の後の生活状況の差
- ⑨Ⅳ 意識の増加～震災以前から不安定な夫婦関係や家族関係

Ⅱ. 時系列対応の大修正へ

Ⅲ. 今後の課題 ④つ～9つに増加

- ①心のケア：上記①～④の子どもへの重点的カウンセリング
- ②校内での相談継続が必要としている子どもへのバックアップ
- ③アンケート調査の実施により、意識の高かった子ども達への支援体制
- ④地域ぐるみの予防を呼びかける
- ⑤ 家庭・学校・地域まるごとの予防策
- ⑥ 町や地域による不安
- ⑦不登校の急増
- ⑧アンケート高得点者13%(2倍に)
- ⑨保護者研修の急増
- ・ ★予防対策～この問題を持たないよう地域まるごとの予防策を考える、

S5

阪神・淡路大震災等と東日本大震災との比較



陸前高田市の一本松：23. 5. 24 気仙中学校土手より古林

S6

* 石巻市に伺う度に…子ども達に災難が… *

- ・ 1年目:健康被害～栄養の偏り・ヘドロ・粉塵・蟻・骨折…
- ・ 平常授業への切り替え・不登校・児童の聞いてもらいたい長蛇の列…
- ・ 3K・孤独死・パゾー(依存症:ギャンブル・物・食物…)
- ・ 震災離婚
- ・ 2年目:震災ラブ・二極化現象(いじめ～学校・地域・避難所での格差
- ・ 仮設住宅や仮住まいの子が減少せず、落ち着かない家庭の増加
- ・ 度々の地震による恐怖 ⇨ 慣れ(認知のバイアス?)
- ・ 噂 ⇨ 地球滅亡説・巨大隕石…
- ・ ストレス ⇨ やまない余震・食事の時間が待ち遠しいおやつ時間が待ち遠しい子減少?
- ・ 3年目:アンケート調査高得点者2倍に
- ・ 不登校中学校1年生全国1位(3.08%)～新聞記事より
- ・ 依然として、やまない地震・仮設や仮住まい生活…
- ・ 不登校に子を出てくる・保健室へ身体の不調を訴える子の増加…

S7

* 不登校の中学生、宮城県が全国最多 震災が影響か *

- ・ 学校基本調査で、昨年度中(2012年度)に中学校で不登校になった生徒の割合を都道府県別にみると、宮城県が最多だった。宮城県教委の7日の発表によると、県内の中学生全体の3.08%(前年度2.92%)が30日以上欠席していた。
- ・ 全国平均は2.56%で、担当者は「東日本大震災の影響」として。全国では、昨年度中に不登校だった小学生が2万1175人(前年度比1447人減)で前年度比6%減。中学生(中等教育学校の前期課程含む)は9万1262人(同3574人減)で、4%減っていた。
- ・ 宮城県の中学生の不登校は07年度以降、減少していたが、5年ぶりに増加に転じた。県内では、5千人超が仮設住宅から通学、県教委は「窮乏な生活が意欲の低下や将来の不安を招いている」としている。
- ・ 被災地では、*福島県が2.34%(前年度2.16%)と増え、*岩手県は1.91%(同1.97%)とほぼ横ばいだった。
H.12年度県教委調べ

今後の課題(S6)としても、他の災害の時は4つでしたが、9つに増加して対応しました。特に、3年目も続く余震の恐怖は更に大きな要因となり、地球破滅説とか崩壊説とか、噂が噂を呼び情報が飛び交い子どもたちの不安を増幅させました。

3年目の今回、不登校の急増で、長野県(S7)と同じように全国1位になったことですが、大街道小学校の場合、アンケート調査結果、高得点者が13%、昨年の2倍になっています。養護教諭からの報告では、保健室へ体調不良を訴える子どもたちの増加や食事が余りおいしくないという子も多くいるとのことでした。

3) 時系列の大幅な変更について

他の災害時は大体、このような時系列にまとめて、安全・安心から健康アンケートを何回かとり、それから最初は資料の提供とか、ハイリスクの要因がある子どもたちと一緒に見ていく、教職員の先生方と一緒に研修、保護者にもカウンセラーが直接対応を説明し、希望者にはカウンセリングやリラクセーションをするという方法が他の災害時の要望でした。

今回は松本大学のプロジェクトチームとして長期支援を念頭に着手したということも有り、経過を追って地域の实情に合わせ対応ができたと思われます。様々な支援の中で学生も子どもたちとともに成長させて頂き、私たち教職員も人生観を考え直す貴重な尊い経験とともに人間的成長もさせて頂きました。最終的目標は子どもたちが仮設住宅からそれぞれの安心な居場所を見つけるまで見届けなければならないと思いますが、まだまだ余震が続き、仮設住宅での生活が続いている状況にあります。

石巻に通う度に子どもたちに災難が降りかかっていました。1年目は健康被害です。栄養の偏りはないだろうかとか?ヘドロとか粉塵により肺は大丈夫?骨折が多く見られ、蟻や蚊の異常発生等々。通う度に本当に心が痛む状態でした。先生方の努力で平常の授業へと徐々に戻ってきて、子どもたちも明るい顔を取り戻し、我々も大変癒されましたが、最初の頃はやはり分離不安によると思われる不登校児童も4、5人いて、教職員と両親と一丸となって共に乗り越えてきました。

2年目には震災離婚や依存症(ギャンブル・物・食べ物 etc.)という言葉に象徴され、寂しさもあって震災ラブということばが聞かれ、二極化現象(経済的格差が生じ羨ましき等からかいじめ等)が起きた、この現象はこれが長野県とちょっと通じているのかな、長野県の場合は震災がないが山国のためか似た状態があり、恥ずかしいことですが、よそ者と地元とにずっといる人との二極化のような現象もあります。

一番心を痛めることは、度重なる余震で、子どもたちは心が休まる時間がないのではないかと心配です。又、一方では慣れて、二次障害的に「認知のバイアス」が起きて、いざというときに逃げられなくなってしまうのではという心配も有ります。

4) 3回のアンケート調査の結果について

3年目が、アンケート調査の結果は高得点になりました。又、不登校の中学生1年生が全国1位という、中日新聞掲載（S7）。それもまた心が痛む記事でありました。人ごとではなく、長野県も不登校については同じ状態が続いています。やっと少し減少してきたところであります。

アメリカのケスラーが疫学者としての研究結果（S8）で、被災者の1割がPTSDになる可能性があり、大体6カ月をたつと3割ぐらいの人を残して7割ぐらいは回復するという。実際日本の他の災害等の場合はもう少しかかっている気がします。これがPTSDの症状で、阪神大震災の子どもたちの時のアンケート調査では2カ月で13%、6カ月で9%だった。足すと約7割は回復すると言うことになる。では大街道のほうはどうだったかといいますと、阪神・淡路大震災の様子（S9）ですが、マグニチュード7.3が発生して、この後火事があり、被害状況は死者が6,400人、行方不明が3人でした。（東日本大震災とは大変な違いがある）負傷者や火傷が多かったり、住宅被害で、一番多かったのは、火災によるもの。避難者が31万6,678人ということでした。平成7年の2月2日で、学校再開は1週間位でした。石巻市での震災1カ月後に見た光景を考えると、阪神・淡路の方が津波がなく、東日本のように広範囲に渡った被害でなかった分かなり助かったかと思われまます。阪神・淡路の場合（S10）は即、教育復興担当教員が200名つけられていました。スクールカウンセラーはまだ50人ぐらいでした。最終的に今は240人ぐらいになっていますが、みんなで連携・共同体制が確立していました。3年後、5年後にもなお心に不安を抱える子どもたちがいて、心のケアをしていました。5年目に行ったときにはもうすっかり復興し跡形もなくきれいになっていました。無人のライナーが市内を回っていました。震災の3年後、5年後ですが、フラッシュバックが起きたり、退行現象が起きます。それからは「みんな共通でやったことにまず共感しよう、いつかきっとよくなることを告げ、安心感を与えることで専門家と一緒に支援を続けていこう」というのが合い言葉でした。

これが阪神・淡路のときの7年に起きたもので表（S11）のように震災の1年後平成8年から

S8

《心の支援を必要とする児童数(ケスラーの研究)》

- ・ ★PTSD:
- ・ <ケスラーの場合>
- ①被災者の1割(ケスラー(米国の疫学者RCケスラー: 1995年併存症調査~有病率1割)生存曲線、サバイバルカーブ)
- ②72日(6ヶ月)経つと3割ぐらいの人を残して、7割は回復する
- ③ i 再体験が5項目中1回
- ii 回避が7回中3回
- iii 過覚醒が5回中2回以上チェック、それらの症状が
- 1ヶ月以上続いて、自覚的な苦悩か社会的な機能の低下が明らかな場合をPTSDという。(DSM-IV)
- ・ <阪神大震災の場合>
- ・ 阪神淡路大震災後の子どもたちの調査ではこの症状を持つ子が被災後2ヶ月で13パーセント、6ヶ月で9パーセントであった
- ・ (朝日新聞1995)。

S9

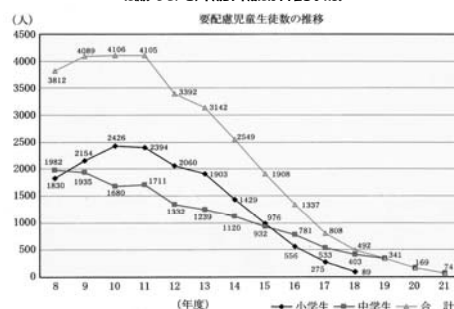
* 阪神・淡路大震災震源: 淡路島北部マグニチュード7.3の地震が発生*
* 兵庫県内被害状況 * ~H.7.1.175時46分~

死者:	6,402人
行方不明者:	3人
負傷者:	40,092人
住宅被害:	538,764棟
焼損棟数:	7,534棟
避難者(ピーク時):	316,678人

- ・ 学校再開: 7. 2. 2
- ・ 教育復興担当教員が配置
- ・ スクールカウンセラーの配置
- ・ 連携・協働体制の確立
- ・ 3年後、5年後にもなお心に不安を抱える子どもがいる
- ・ ex.) フラッシュバックが起きたり、退行現象が起きます等
- ・ 対応 * 共感
- ・ * いつかきっとよくなることを告げ、安心感を与えること
- ・ * 専門家と相談しつつ、保護者も含め子どもの支援を

S10

阪神・淡路大震災により心の健康に付いて教育的配慮を必要とする児童生徒数の推移
小中学校に在籍する要配慮児童生徒数の数は、平成10年度の4,106名をピークに、全学年において着実に減少している、平成21年度には74名となった。



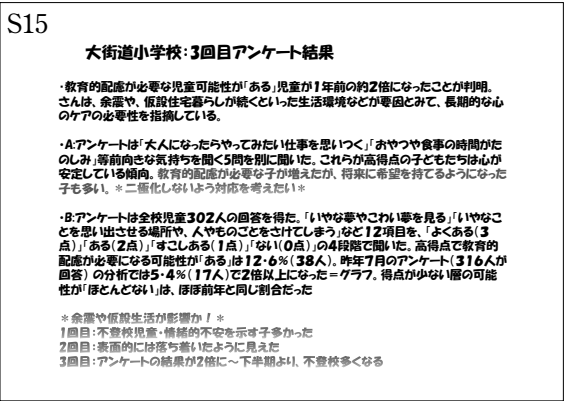
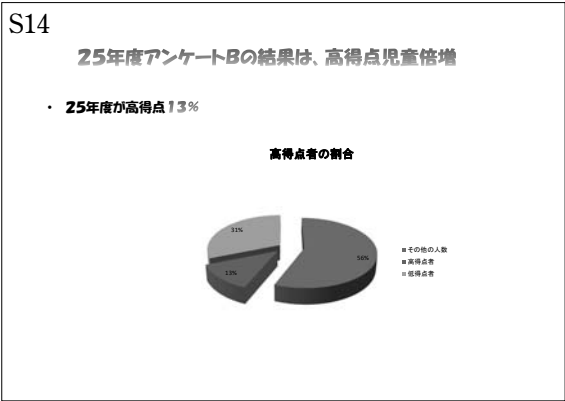
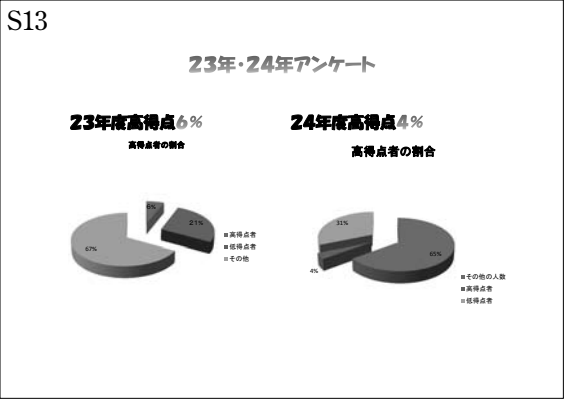
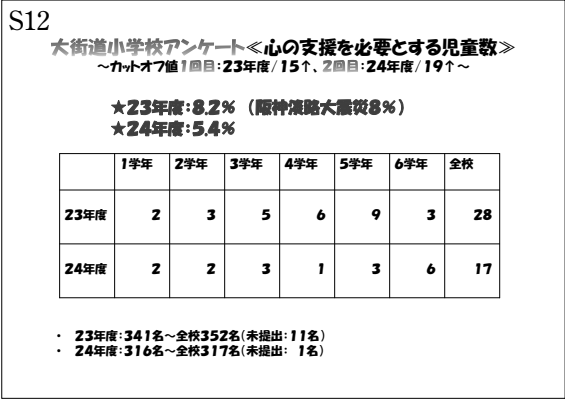
S11

[各年度7月1日現在 単位:人]

年度	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
小学生	1830	2154	2426	2394	2060	1903	1429	976	556	275	89			
中学生	1982	1935	1680	1711	1332	1239	1120	932	781	533	403	341	169	74
合計	3812	4089	4106	4105	3392	3142	2549	1908	1337	808	492	341	169	74
増減		277	17	-1	-713	-250	-593	-641	-571	-529	-316	-151	-172	-95

* 震災直後から続く「震災の恐怖によるストレス」に、恒久的な住宅である復興住宅への転居等の「住宅環境の変化」や「通学状況の変化」が、**加わってピークとなったが、14年が経過し、要配慮児童生徒数の0.15%にあたる74名にまで減少した。**
(ピークは平成11年の0.82%)

* 大きな災害であったため、児童生徒への影響が大きく、阪神・淡路大震災に傷ついた心のケア担当教員を中心に教育活動を通じ援助に当たしたが、
* 全学年においておおむね減少し、要配慮児童生徒数が、**ほぼ減少に転じるまでに5年の歳月が必要だった。**



21年までですが、大体峠を越すのに4、5年間かかったと言われています。最初、小学生が多くその後、中学生が多くなったというのが検証の結果です。これが数字的なものですが、ストレスとか、復興住宅等に転居したりして通学状態の変化で、ピークになったのではないかという説もありますが、大体13年位経って、74名の二桁までに減少した。5年間の歳月が減少するためにかかった、必要だったと強調しています。大街道小学校の場合は23年度が1年目で、8.2%、阪神が8%でした。今回アンケートを取らせて頂いた、24年度が大街道の場合減少した。2年間の結果23年度高得点者は6%、24年度が4%でした。25年度には他の震災での検証結果と同じ増加で13%に、やはり3年ぐらいからが上昇傾向がありピークか。それから5年間かかり阪神では落ち着きを取り戻したそうです(S12～S15)。これから5年位は石巻市も細やかな相談体制が必要かと予測していくことが大切と思われる。大街道小学校25年度のアンケートの結果ですが、1年前の2倍になったということ。余震や仮設住宅暮らしが続く家庭環境の整わないためではないかと思われます。今回はAとBと2つのアンケートを製作し、Aの方では将来の仕事を思いつくか等の、問いに将来に希望を持つ子も多く、少し前向きな子どもたちが増えた。対して教育的な配慮が必要な子も多くなり、二極化現象を懸念する状況も見られました。

教職員の心のケアでは、取り立てて何もしていない状況ですが、一緒に世間話・定期的に訪問し支援体制をアピール等々です。個々の相談に対してはチームでかかわることを中心に据え、担任等が1人で抱え込まない。これは阪神・淡路、中越で教職員に対する研修会に使用した資料(S16)ですが、自分自身の限界を知り、自分を尊重したり自分自身のケアを優先して欲しいことを伝えました。又、是非、自分に合ったストレス解消の一つ持って、心と体の健康に日々心がけてほしい。家族や教職員同士もお互いにサポートして、笑いを忘れず、気持ちを和らげて安心できる家庭や職場に。大街道小学校へ訪問した時は、校長先生、教頭先生初め教職員が1つになって安心して子どもと接する態勢ができていっているのを感じることができました。

大街道小学校は、これから3年目、4年目、もしかしたら阪神と同じようにピークを迎えるとい

うことも視野に、去年は子供たちの心を守るためにもう一度という、「きずな」(S17) というパンフレットを全戸に配布しました。今年は、子どもたちに将来に希望を持ってもらいたいという願いを込めて「心に太陽を」の案を作成中です。以上で、阪神・淡路との比較を終わりたいと思います。

S16

教職員の心のケア

- ・ 1. 先ず、チームで悩む～
一人で抱え込まない
- ・ 2. 燃え尽き症候群にならない為に
① 自分自身の限界を知り、自分を
尊重、自分自身のケアを優先
- ・ ② 心と身体の健康に心がける
- ・ 3. 家族・教職員同士でお互いにサ
ポートする
- ・ 4. 笑いを忘れず、気持ちを和らげる
よう心掛ける
- ・ 5. 趣味や楽しみ時間も大切に
- ・ 6. 自分に合ったストレス解消法を実
行しましょう！



S17

大街道小学校全校配布&教育委員会へ持参

子どもたちの心を守るためにもう一度！



- 子どもたちの心を守るために大切なこと
- ～キーワード～ 絆・安全・安心感・信頼感
1. 家庭から：家族みんなの笑顔を守る・話を聴く・一緒に遊ぶ
 2. 学校から：先生や先生と元気に遊ぶ
 3. 地域から：笑顔であいさつ・助けあいの風習を
 4. 子どもたちの心で感じる 希望を

大街道 大街道小学校 大街道小学校 大街道小学校

S18

本年度も全家庭へのパンフレット配布予定 準備中

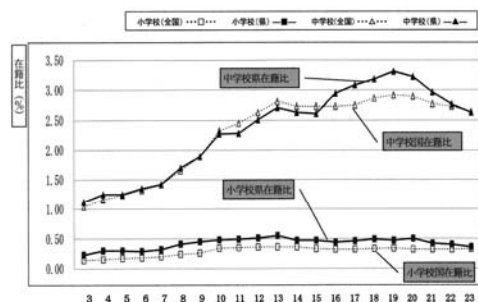
子どもたちに夢を！～家庭・地域・学校から絆～

みんなの心に太陽を！



「太陽の花」絵 ○○○○さん

S2

長野県の不登校の現状
～不登校児童生徒の在籍比(経年変化)～1

S3

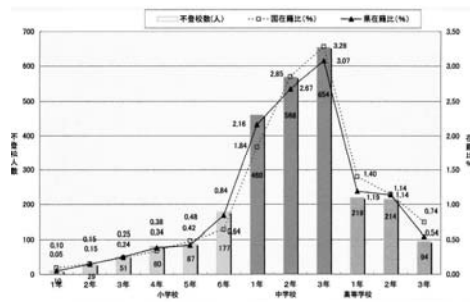
不登校児童生徒の在籍比(経年変化)～2

※小・中学校の不登校在籍比は平成21年度以降、低下の傾向を示しているが、不登校を含めた「理由別長期欠席生徒」(学校基本調査)の在籍比は全国に比べて行為の状況は変わらない

		年度	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
小・中 学 生	不登校在籍比（％）	258	438	455	440	479	598	625	651	657	698	729	820	808	376	591	530	598	622	534	488	4	4
	全国	0.12	0.20	0.20	0.19	0.22	0.41	0.45	0.48	0.48	0.55	0.47	0.47	0.47	0.44	0.45	0.48	0.47	0.50	0.42	0.48	0.1	0.1
	東京都	0.14	0.15	0.17	0.18	0.20	0.24	0.26	0.24	0.25	0.26	0.26	0.30	0.30	0.32	0.32	0.32	0.33	0.34	0.32	0.32	0.2	0.1
	全国	2	1	4	5	4	4	6	5	6	5	6	6	5	7	4	3	4	1	5	7	1	1
中 学 生	不登校在籍比（％）	1,028	1,115	1,098	1,198	1,338	1,471	1,741	1,871	1,825	1,933	1,928	1,778	1,947	2,000	2,000	2,186	2,191	1,922	1,773	1,678		
	全国	1.12	1.05	1.25	1.35	1.42	1.76	1.88	1.88	2.12	2.18	2.17	2.42	2.61	2.84	3.01	3.18	3.21	3.02	2.76	2.76	2.1	2.1
	東京都	0.94	1.16	1.24	1.22	1.42	1.65	1.88	2.12	2.45	2.46	2.61	2.72	2.79	2.79	2.76	2.88	2.88	2.88	2.77	2.77	2.1	2.1
	全国	15	16	14	24	22	24	29	29	30	28	25	25	26	26	27	7	8	5	7	7	21	21

S4

学年別不登校数



S5

直接のきっかけ別人数(複数回答) 単位:人、%

区分	小学校(割合)	中学校(割合)	高等学校(割合)
① いじめ	5 (1.0)	22 (1.3)	6 (0.8)
② いじめを除く友人関係をめぐる問題	48 (9.6)	286 (16.3)	126 (17.2)
③ 教師との関係をめぐる問題	39 (7.8)	143 (8.1)	4 (0.5)
④ 学業の予備	47 (9.4)	206 (11.7)	68 (9.3)
⑤ 通学にかかる不安	17 (3.4)	129 (7.3)	24 (3.3)
⑥ クラブ活動、部活動への不参加	1 (0.2)	37 (2.1)	7 (1.0)
⑦ 学校のきまり等をめぐる問題	3 (0.6)	39 (2.2)	14 (1.9)
⑧ 入学、転校入学、進級時の不適応	22 (4.4)	74 (4.3)	29 (4.0)
⑨ 家庭の生活環境の急激な変化	58 (11.6)	104 (5.9)	25 (3.4)
⑩ 親子関係をめぐる問題	114 (22.9)	245 (13.7)	392 (53.6)
⑪ 家庭内の不和	73 (14.7)	118 (6.6)	20 (2.7)
⑫ 病気による欠席	53 (10.6)	145 (8.3)	78 (10.7)
⑬ あそび・旅行	17 (3.4)	130 (7.4)	35 (4.8)
⑭ 無気力	46 (9.2)	213 (12.1)	126 (17.2)
⑮ 不安などの情緒的混乱	116 (23.3)	400 (22.8)	208 (28.4)
⑯ 意図的な欠席	89 (17.8)	173 (9.8)	26 (3.6)
⑰ その他本人に関わる問題	85 (17.0)	167 (9.5)	33 (4.5)
⑱ その他	26 (5.2)	54 (3.1)	4 (0.5)
⑲ 不明	15 (3.0)	35 (2.0)	1 (0.1)

※調査名:文部科学省「調査対象:県内全74校、小・中・高各学年」
 ・小学校では「不安などの情緒的混乱」が最も多く、次いで「親子関係をめぐる問題」の順である
 ・中学校では「不安などの情緒的混乱」が最も多く、次いで「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「無気力」の順である
 ・高等学校では「不安などの情緒的混乱」が最も多く、次いで「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「無気力」の順である

高校は人間関係と無気力が続いています。

④実際は本人だとか家庭だとか学校という問題ばかりではありません。以下に列举します。

- ・地域性：山国で北アルプス、中央アルプス、南アルプスに囲まれ、閉ざされた地域という事と、交通の手段が少なく自家用車が主な手段になっている。従って、全てにおいて親が子どもたちを送迎する状況～買い物は勿論、習い事、友達の家に遊びに行く、1人で行けない環境因に、依存的になりやすく、低学年の場合は分離不安が中心課題になる。
- ・閉鎖性：転校生の不登校の多さや発達障害の子の不登校も目立つ。
- ・母親の就業率が高いと言われている、その割には父親の家事や子育てへの協力が少ない。
- ・3世代の同居が多く、3世代の境界が曖昧な家庭も多くみられ等々も誘因ではないか。

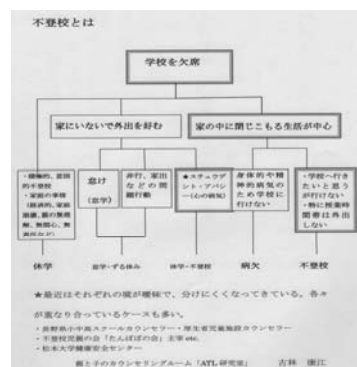
⑤不登校というのはフローチャート (S6, 古林作成) のように、昔は学校を休んで家に閉じこもる、学校に行きたいと思っても行けない。例外ではスチュウデントアパシーで、高校生、大学生が中心のアルバイトは行くが授業は休むという学生がいました。今はこの表の各々の境界がなくなってきました。

⑥現状：大きな変化が見られる点は、以下の通りです。

- ・発達障害を持っている子が不登校の3人から4人に一人以上の割合と思われる。個性的で性格的に不器用な子とか、コミュニケーションが苦手な子
- ・家庭環境が整わない子
- ・学習が分からない子も多くなっています。
- ・低学年では母子分離不安が多くみられる。被災地においては高学年においても分離不安が見ら

S6

不登校とは



れます。

・社会性・コミュニケーションスキル特に集団で苦手な子、いじめによるもの

⑦長野県の不登校支援の実際（S7）についてです。

長野県の場合には、平成11年、12年と2年間、古林が拠点校方式を試行することになりました。表のように、一つの拠点校中学を中心に対象校小学校を巡回します。拠点校には相談電話が設置され、全小中学校の相談が受けられるという体制で試行した結果、メリット、デメリットはあるがデメリットを克服し継続が望ましいとの家庭や地域の希望もあり、これが今、長野県方式として定着している方式です。全県の各拠点中学校にはスクールカウンセラー1人が配置され、対象校の小学校へも訪問する、拠点校方式が行われています。又、全高校にもスクールカウンセラーが県の単独事業（巡回式～一人で3～5校を巡回）で配置されています。

⑧中学生、高校生の不登校事例と支援例（S8）：個々に対応は違いますが、一度は心を開放、気持ちを回復することも大事です。開放をしながら進路等を進めていく。小学生、中学生の場合は休まないことが基本となります。居場所の多様化を考慮し初期対応を速やかに行う。学校での対応としてはできるだけ「休まない」を念頭に一人一人の個性に合った方法を工夫しています。居場所の多様化～保健室、図書館、部活、支援学級、校内の中間教室、カウンセリングルーム登校・会議室とかパソコンとか事務室、校長室も選択肢です。高学年では教室の座席を考慮、後ろの席（後ろから見られているという不安を持つ子が多い）、苦手の子から離す。又、訪問指導教諭も配置されて活躍している地域もあります。毎日のように各家庭を訪問したり、部活の仲の良い子どもたちに配付物を持っていってもらったりしています。間接的な接触では電話、手紙、ファクス、メール等に出られる子も結構います。

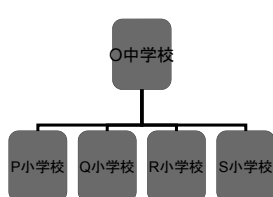
次に、登校した場合の対応として大切なことは、いじめの予防や防止です。絶対に見逃さないようチームで連絡を密にしていきます。更に、強い引きこもりに伴う不登校では鬱になりやすく、鬱から自死への予防が大切になります。この見取りと支援対策にも力を入れています。時間の経過に伴い籠りが強くなっていく傾向となり易くなります。子どもに合った方法を工夫し、間接的な接触やできるなら直接的な接触を混ぜながら、登校刺激をしてみます。

⑨登校刺激について：登校刺激をすることで状況が分かりやすくなる、例えば自分の部屋や押し入れ、トイレに籠ってしまうと同時に顔色が蒼白になる等抵抗が強い子には、登校刺激を控え間接的な方法を考えることも大切です。

ゲームやテレビ、本などに逃げている或いは逃避している子、自分らしい時間を持ちたい子には、少し刺激をしてみるが様子によっては直ぐサラッと引くことが大切。このタイプは高学年の子どもや中学生に多いようです。又、例えば、誰に会えるのか会えないのか、家族にも会えない場合には登校刺激は勿論心の問題も考えることも大切になります。中学生になると昼夜逆転がとて多くなって、昼間行っても会えない。できるだけ学校の授業時間中は避け、夕方（午後）行

S7

拠点校方式H11、12年と2年間古林試行に結果～
（翌年の13年より長野県方式として現在も使われている）
～〇中学校を拠点に対象校P、Q、R、S小学校を巡回～



※小・中・高校との連携役も兼ね、なだかな移住へ応援～
一任に中学見学も～
※希望によりカウンセリングやSST等の継続
※家庭との連携も継続
※プラス・マイナスも有るが、家庭側では継続希望が99%
※中学で小学校の相談も受けることができる（地域によって異なる）

S8

※ 1. 中・高校生の不登校事例と支援例

- ・ 1. 気持ちの解放が必要（社会性↓）
- ・ 性格～真面目、緊張感強い、内向的、友人関係は消極的
- ・ 不登校になると人々を避け、閉じこもりがち
- ・ 支援～不安や緊張を和らげ、受容する、本人のペースを尊重
- ・ 2. 進路選択をはかる
- ・ 性格～相対的には健康度が高い～不本意入学、理想と現実の相違大、学習への自信↓
- ・ 支援～自分の置かれている状況をどうえられ、一緒に問題点を整理する
- ・ 3. 育てる（社会性↓）
- ・ 性格～耐性低い、コミュニケーションスキル低い
- ・ 支援～信頼関係を築く、興味のあること（自己表現）を引き出し、積極的に、根気強くかわる
- ・ 4. 耐性をつける（耐性↓）：反社会的行動を示す
- ・ 性格～逃避的で幼稚、耐性が乏しい、自己中心的で物事を深く考えない
- ・ 支援～逃避せず問題解決に直面させる、自分の行動や生活の振り返りを、励まししながら自己コントロールをたかめる
- ・ 5. 混合型

くと会えることが多い。できるだけ学校のこととか勉強のことを言わずに、その子の好きな話題・遊び中心にしながら信頼関係をつくり一緒に成長していくという丁寧なプロセスが大切になります。

- ⑩キーパーソンがいる場合とか、低学年児童とか高学年や中学でも積極的でもかかわれることがあります。低学年の分離不安の事例では中心に母子登校を勧めています。高学年、中学生でも母子登校で登校できる子も結構大勢見られます。先ず、教職員はチームでかかわる。発達段階や個々の状況によって柔軟にしていく。積極的な接触等々試みて、登校刺激も悪いことではなく、刺激してみて全く様子が無理な状況の時は即、引き下がることが大事です。タッチ登校（先生の所にタッチして、それだけで授業を受けずに帰る）だとか、挨拶だけの登校だとか、それも最初は許すが、だんだん行動療法的支援によって少しずつ長くいられるよう工夫します。部活とかクラブなら行ける子もかなり多く、土・日の野球部やテニス部にのみ出られる子も居りそこから広げていく方法も成功例が多い。

外出も地元でなく、この学校区以外のところへは結構喜んで行く場合があります。それも体を動かすということで大事なことです。それから夕方とか夜間登校とか早朝登校もやってはみましたが、これもうまくいく子も少数いました。しかし、余りこの方法は長続きしないケースも見られます。やはりタッチ登校でもいいから朝からやってみるというのが今、成功している気がします。

- ⑪中学の場合には、心の拠点を持つために、休み始めたら即、部活や校内の居場所・教室等生徒に合わせ選択していく。安心できる幼稚園、保育園とか小学校へ行って、それから中学校へ来るとか、本人の選択に応じて出来る範囲で支援していく。勉強のおくれが原因と思われる子については、得意な教科からクラスの授業へ誘ったり、中間教室や支援学級・家庭教師とか塾とか本人が望んだ方法を取り入れ自信を付け復帰できたケースも多くあります。又、家庭訪問専門の先生が配置され、訪問したり、空き時間に学校へ連れて来ていただくことも。発達障害を持つ子もかなりの多くいますので、心の緊張を取りながら個々の特質に合わせ支援している状況です。

- ⑫家族も含めたチームの協働、小学校での母子登校による成功例は多い。母親・他の家族が連れてきます。母子登校が一クラスに3人くらいの時期もありました。しかし、今は少なくなってきました。支援学級とか相談学級等居場所を見つけて、そこから徐々にクラスや個性に合った支援学級へ行くケースが多くあります。

中学生でも母子登校が可能な子もいますし、中2では職場実習には積極的に参加（美容室への実習や動物病院・パン屋さん・福祉施設・幼稚園等々）に行く。その経験から少し自信がつき学校へ登校する子もいます。それから中3では進学問題に大きく反応し、少し進学に希望が出てくればかなりの刺激も登校の良い切っ掛けとなるケースが多くあります。修学旅行からの登校の子も少しいます。並行して医療やリハビリ、専門機関への紹介する子も多います。日がたてばたつほど登校しづらくなるという傾向が多くあって、無理せず、間接的な対応から信頼関係をつくった上でカウンセリング室登校でもいいので、学校へ登校することを促していくことも効果的です。

- ⑬性格にもよりますがパターン化してしまった、こだわりや不安や将来のことも、学校の表面上だけを見て、「無意味」と考え来なくなる等、個性の強い子どもたちもいます。支援として家庭訪問などもチームで支援していきます。

3) 認知のずれ (S9)

認知というのは、三つの働きがあって、「知覚」、「記憶」、それからもう一つ、「思考」です。

S9

認知とは～TEACCH(ティーチプログラム)・アセスメント

発達障がいの子の認知のつまずき(ずれ)は？

認知の3つの働き

- ・ 1. 知覚:
 - ・ 聞く・見る・感じる
 - ・ 1. 言葉の聞き取りが正確にできない
 - ・ 1つの言葉にこだわり全体の理解が難しい
 - ・ 特定の事物だけに視線が向いて、全体の状況をつかめない
- ・ 2. 記憶:
 - ・ 記憶する・情報を処理する
 - ・ 2. 忘れっぽい
 - ・ 2つ以上の指示を憶えて行動できない
 - ・ 物事の見過しをもつことができない
 - ・ 時間の流れを把握できない
 - ・ 行動の計画が立てられない等
- ・ 3. 思考:
 - ・ 思う・考える
 - ・ 3. 柔軟に物事を考えられない
 - ・ 自分の考え方にとられ、人の意見を受け入れられない
 - ・ 失敗すると、この世の終わりのように思ってしまう等

このどこが不器用か見ていきます。不登校の3人から4人、もっと多いと思いますが、2人から3人ぐらいはやはり発達障害の子がいます。どこの認知がうまくいっていないかということを考慮し、保健室登校や支援学級登校の子どもたちを応援するのも効果が上がりました。医療や療育機関にも紹介したり、アセスメントをとることで、個々の認知の特性を知り、学校での対応も上手に引き出せ、登校に至るケースもあります。例えば、ティーチプログラムの構造化や視覚化・行動療法・SSTなど駆使してみる必要があります。

4) 子どもの支援 6つの視点 (S10, S11)

1) 心の支援が中心

子どもの心に寄り添うことで、対応されていることと思います。

2) 発達論による支援～スモールステップ＝螺旋階段とレディネスについて、その子どもの各領域の発達がどこまで準備ができていて、どこから、もう一度スモールステップで目標に向かうかをチェックリスト等で仮説を立てる。以前はスモールステップは階段を上るように少しずつ発達を促すと考えたのですが、現在は、螺旋階段説が有効と考えられるようになりました。必ず階段状に目的に向かっていくのではなく、上がるとき、下がってしまうときもあり、又、休むときもあるという理論からきています。折角昇ったと思ったら、すっと落ちたり、平行線が続くとなると親も細かく階段状に昇らないことでやる気を失ってしまうことも良くありました。やはり、螺旋状に昇るという理論で柔軟に見ていくことが良いと思われます。

3) 応用行動分析～ペアレントトレーニングの利用を生かした支援を有効に使う。これも一つ、不登校の子たちに大切な方法です。約束は一つ。よい行動は即褒める。叱られたり、いじめられたりしたことはフラッシュバックに残りやすい。よくない行動はしばらく見逃して、その次の約束に入れる。家族、特に母親の子育ての自信を取り戻すこともとても大事で、特に母親の場合、子育てに自信がなくなってしまう、不登校の子どもと同じような心理状態になっているということも見られ、本人と家族に自己肯定観を高める対応等が必要です。

4) TEACCH プログラム＝構造化です。物や時間の調整や構造化・視覚化で、できるだけ見てわかる方法「見える化＝視覚化」。例えば視覚化とか構造化、時間とか空間などの構造化ですが、きょうの予定表をつくり、実際に本人もわかり、それから担任の先生や支援チーム全員がわかるようにする。今、この子がどのように行動したいかをわかるために必ず書いてもらったり、カレンダーへ終わった活動を、「1時間目終わったね」ということで、この予定表にシールを張ったり花丸を書いたりして、終わった子の活動を本人に視覚的にきちっと見せてあげることによって、意欲や達成感、褒められていることを視覚化することが、不登校の子、発達障害の子にかかわらず、他のクラ

S10

支援 6つの視点～特にクラス以外で過ごす場合の対応～1

- ・ 1. 心の支援～困っているのは子ども・不登校への理解⇒伴走、受容…
- ・ 2. 発達論による支援
- ・ 3. 応用行動分析(ペア・トレ等)の理論を生かした支援～行動への支援
- ・ 4. TEACCH(ティーチ)プログラム
～環境調整による構造化による支援(物や時間の調整)・視覚化
- ・ 5. 周囲の人の連携による支援
- ・ 6. その他、医療・福祉等の専門機関(経済的・物的・心的トレーニング等々の支援)への紹介・連携
- ・ ～今日の予定表・カレンダーへおわった活動にシールや花丸等印を付け
⇒意欲・達成感・耐性⇒褒められていることを視覚化
的対応を用いた支援～

★認知の特性を見極め、上記、6つの視点を駆使し支援へ！

S11

6つの視点を使った事例～2

- ・ 1. 心の支援～不登校児の理解と支援の知識
- ・ 2. レジネス・スモールステップ
- ・ 3. ペアレント・トレーニングを有効に使う(約束は1つ、良い行動は即、褒める…)～本児は勿論、家族(特に母親の子育てへの自信を)の自己肯定感(自信)を高める。
- ・ 3. 4. を使った対応の例～今日の予定表・カレンダーへ終わった活動にシールや花丸等印を付け⇒意欲・達成感・耐性⇒褒められていることを視覚化での対応を用いた支援
- ・ ～21コマ・22コマ参考
- ・ 5. 周囲の連携⇒チームで係わる、一人(担任・担当・S. C等)で抱えきれない⇒みんなで知恵と支え合いを
- ・ 6. 地域の他の専門機関の活用・連携・紹介

スの子にとっても、成功するケースが多くあります。

5) 周囲による連携

6) 地域の専門機関との連携

それから繰り返しになりますが、チームでかかわること、これは支援の基本です。

それともう一つ、行動観察法、いろいろありますが、その場その場の記録のとり方ですが、まず家族から情報を聞き取り、これをチームで共有していく。学校での情報も加えて、共有記録をつけます。誰が見ても今どんな状態かわかるような個々の記録等は校内でも共有できる形（記録表）を作ります。学校によっては長野県の場合はパソコンへ記録を入れて、みんなで新たなものがあつたらずぐ書き入れる工夫をしている学校があります。

5) チェックリスト (S12)

この登校傾向予防チェックリスト（これは私古林が作製）は、チームで共有している表です。先生方とこんなことがあったら要注意として支援の手を入れます。不登校の子ども達は生活面とか学習面、身体面、それから全般的なことで、活気がなくなったり、やる気が出なかったり、完璧でないと不安になります。心が不安定になるとこれがあります。部活だけ一生懸命になったり、逆に部活に行かなくなったりと、物事を決めるのに時間がかかったり、なかなか決定しなかったり判断できない、このようなケースが多く見られます。集団を避けるようになることもあります。

6) 予定表（自己目標）(S13)

1日の1時間目から6時間目（何時から何時までと書いて）、1時間の予定、何をしますかと自分で書きいれてもらいます。自分で約束したことは不思議と本人は必ず守ります。ところが、人が強制したことは絶対やらない、そのような特徴を持っています。では教室のどこの場所でやるのというのを丸、それができたら花丸というようにシールを貼っていきます。

7) 長期休みの過ごし方の例 (S14)

長期休みの後、登校できない子多くなる傾向があります。

a. 家庭での対応：長期休みの後、ひきこもってしまうケースが多くなります。休み中のリズムはできるだけ、暮れの31日とかクリスマスなど例外的な事以外は崩さないように、学校へ登校でき

S12

不登校傾向（予防）チェックリスト

○ ×

＜生活面＞	
1	1 欠席が固定化され、一人でいることが多くなった。
2	2 先生を避けるように見える。
3	3 図書館通いが多くなった。
4	4 遅刻や早退が多くなった。
5	5 長期や休日の翌日の欠席が多くなった。（家では外出を好まない様子）
6	6 特定の教科の欠席や理由ははっきりしない欠席が目立つようになった。
7	7 ゲームや携帯・パソコンに夢中になった。（昼夜逆転・朝起きずらい）
8	8 忘れものが多くなった。
＜学習面＞	
9	9 授業中落ち着かない又は、ぼんやりしている。
10	10 特定の教科、或いは、全体的に成績が急に落ちてきた。
11	11 手を上げなくなった。
12	12 特定の教科のやる気なくなった。
13	13 絵に変化がみられる。（色・乱雑・線が薄い・内容・丁寧過ぎ etc.）
＜身体面＞	
13	13 不調を訴えたり、一寸のことで良く保健室へ行くようになった。
14	14 腹痛・頭痛・発熱など訴えることが多くなった。
15	15 給食を避けたり、給食を良く残すようになった。（好き嫌いが多くなることも）
＜全般＞	
16	16 活気がなくなり、やる気が出ない。
17	17 完璧でないと不安になる。
18	18 部活動だけ一生懸命になる。逆に嫌がる。
19	19 物事を決めるのに時間がかかる。なかなか決断できない。
20	20 集団を避けるようになる。

○の数

古林康江用

S13

今日の予定

月 日 () 年 組 名前

授業	時 間	教科（活動予定等）	場 所	花丸
～登校～		一日の予定の記入	教室・図書室・支援教室 保健室・会議室・	
1	8:20～ 9:05			
2	9:10～ 9:55			
3	10:15～ 11:00			
4	11:05～ 11:50			
給食 清掃 ～昼休み～	12:35 12:55 13:15～			
5	14:00 14:05～			
6	14:50 15:00			
帰りの会 完全下校	15:30			

★登校した日はカレンダーへも花丸かシール

る時間に起こすように習慣付けます（休み中は、生活のリズムを作りやすい傾向があります）。また、宿題は必ず休みの最初に済ませてしまう。本人が乗り気でない場合も、小学校の低学年の場合は親が手伝っても良いので一応済みます。それから自由研究とか書き初めも同様ですが、本人に選ばせて、できるだけ休みの初めに済ませてしまう。この準備が万端に整わなければ登校しないケースが多い。休みの後半は、家族みんなが家の内外のお掃除とか、一緒に行動して即、褒める。前述のペアレント療法ですが、絆をつくって、家庭が安心の場所であることも大事です。夫婦喧嘩が絶えないと心配・不安が増幅し学校へ行けないという小学生もいました。ペアレントトレーニングも家庭で実践をお願いします。休み中はできるだけ、親類の子や近所の友達等と遊ばせたり、交流を持たせたり、登校初日はできるだけ家族全員 1、2、3 で家を出てもらうなどの工夫をしてもらいます。

b. 学校での対応：

- ・学校に連れてくることができた時は、母親をオーバーな位褒める等ペアレントトレーニングをお母さんにも行います。自信をつける、自己肯定観を強める、安心、明るくきずなづくりを夏休み中にさせていただくことで、学校での対応が有効になってきます。
- ・休み中、先生との交流関係をできるだけ切らないということが必要です。休み中、チームの 1 人 1 回ぐらい連絡（電話、手紙、メール、家庭訪問など）をとります。年賀状をもらうことが好きです。年賀状は視覚化されますので、それを持って 1 日目に登校する子もいます。暑中見舞いとか。休み明け初日はできるだけ子供が登校しやすい教科とか行事などを入れてあげることで、登校する子も多くなります。頑張って連れてきていただいた家族にねぎらいの言葉をかけることで、一緒になってまた連れてこようという気持ち、ペアレントトレーニングの手法ですが、提出物持参のみでも褒めてみることです。
- ・特にお母さんへの対応ですが（お父さんも祖父母もそうですが）、学校へ行くのが当たり前だという考えの中で、突然学校へ行かなくなったことで、家中、全部が本当に傷ついてしまってなかなか明るい家庭にならないですね。障害を持った途端にもうショック、悲しみと怒り、再起したりと、さっきの螺旋階段状ではないんですが、いろいろなショックを受けると言われていて、不登校になったというそれでもう家中が本当に不安定になってしまいます。（S15、S16）

S14

長期休みへの対応～2

- ・＜学校での対応例＞
 - ・ 1. 休み中、教職員チームと児童との交流継続的に、(ex 他児のいない校内へ登校or家庭訪問or手紙orメール電話oretc.)休み中に一人一回はする。～年賀状・暑中見舞い喜ぶ(視覚化)
 - ・ 2. 休み明け、初日はできるだけ不登校児が登校しやすい教科(自信のある)や行事(好きな楽しい)を意図的に入れ家族にも協力頂く。頑張って連れて来ていただいた家族に労いの言葉を！
 - ・ 3. 提出物持参のみでも労う・褒める・・・
- ・ ☆上記、各々の児童生徒に合った方法を試してみる。

S15

家族(特に母親・次に父や祖父母)からの質問

- ・登校前夜について
- ・日常生活について
- ・①朝、起きることについて
- ・②登校前夜について
- ・③欠席中の一日の過ごし方
- ・家族全員の共通理解(父・母・祖父母との関係)
- ・パソコン・携帯・テレビ・マンガの色々
- ・外出について
- ・兄弟関係について(愛情の分配)
- ・兄弟争いについて
- ・不登校児の将来について(進学・就職・・・)
- ・医療や他の専門機関への紹介・色々
- ・その他

図1 先天奇形をもつ子どもの誕生に対する正常な親の反応の軌跡を示す仮説的な図

※ 自分の子育てへの反動(失敗)・肯定感・認めず受け入れ・不安定に受け入れし得ない※

S16

Copley, et al.(1987)は慢性的悲哀の概念に段階説を取り込んだ螺旋形モデルを報告～不登校児の親も同様！

図6 障害の受容の過程

- ・親の心には、否定と肯定の気持ちが常に同居しており、不登校・障害の認識の過程は否定と肯定の繰り返しである。それは両面色の違うリボンを螺旋に伸ばしたり縮めたりしたときのように。
- ・★親が不登校・障がい否定しているように見えても受け入れようとする過程でもある。

8) たんぽぽの親の会（古林主宰～H.1～現在）での様子（S17）

①会での話題で朝起こすことについて良く質問があります。答えとして、朝は必ず登校できる時間に声だけかける或いはカーテンを開ける或いは本人の好きな曲をかける等、その子に合わせて対応をして、声かけをすることです。例えば、「ご飯が冷めちゃうよ。一緒にご飯食べよう・・・」など。

②昼夜逆転については自分が本当に自分らしくいられる時間をつくりたいための自己防衛機制であることも多いという事を話します。

次に、欠席中の一日はどのように過ごし

たらいいでしょうか。これはタンポポの会での話ですが、表では質問の多い順にあげてあります。パソコン、携帯、テレビ、漫画などの是々非々ですが、それに集中することで自分らしい時間を持って、少しずつ緊張が緩むことも考えると全部だめということではなく、やはり、制限を与えながら対応します。それから外出についての質問が多い。

S17

たんぽぽの会(親の会)より

- ・ 親が乗り越えた時の言葉:
- ・ 「子どもの御蔭で人間として親自身が成長させてもらった!!」
- ・ ～子どもに感謝!
- ・ 共感
- ・ 親同士元気になったメッセージを持って、再会の喜びの場に
- ・ 困った時連絡をしてくる⇒親・子ども～絆大切
- ・ 自立したメッセージをメールや手紙・電話で頂き繋がりの大切さ
- ・ 家庭訪問時の良好な受け入れ・笑顔
- ・ * 伴走者:不登校児童・生徒・保護者と伴走させて頂き沢山の宝物を得た!! *

9) 兄弟関係

兄弟と一緒に不登校になるケースがとても多いです。1人が不登校になると愛情の分割がうまくいかないために、兄弟全員不登校ということもかなりの頻度であります。家族には、よく話すのですが、1人が不登校になった場合には、必ず不登校でない子にも愛情の分割、3人いれば3分の1ずつ、こっそりでもいいから「頑張っていて、お母さん助かるわ」等労いの言葉を必ずかける。不登校の子のみに注目を向けることなく気を配ることも大切です。

- ・ 兄弟喧嘩：かなり兄弟の間では誰か学校に行かないことからの喧嘩は激しいものがあると聞きます。兄弟喧嘩は親は出ないということを中心にお話します。愛情の分割から来ていますので、どっちが悪いということにしない。「うるさいから外でやって」等怪我がなさそうでしたら分け入らないことです。

10) 不登校児の将来

不登校の子の将来についてなんですが、小、中、高、大学生まで見ている経験から言いますと、心配ないといえます。大体高校から元気になる子もいますし、大学から元気になる子もますので、余り追い込んで病気にしない限りは、どこかで頑張るから大丈夫と相談者には一応安心感を与えています。病院ですが、これはその子その子の状況によって、即、医療へ紹介するケースもあります。

- ・ 親自身の子育ての反省が一番多いのですが、肯定的に話をしていきます。例えば次のように話をしてくれた保護者が多くいます。

*この子の御蔭で人間として親自身が成長させてもらって、本当に子どもに感謝したいと思う親が多い。親同士元気になったメッセージを持って親の会に出てきたり、子どもたちも元気になったり、困ったときにタンポポの会へ参加したり、連絡をしてきます。

*私自身も勉強させていただいているというのが現状です。

11) 不登校や引きこもりから鬱

不登校や引きこもりから鬱、自死等に移りやすく、自死の75%が精神障害、鬱を持っているというデーターも有り予防策として鬱の発見は大事です。表（S18）が自殺未遂や自死の割合です。精神障害があるなしで違いが大きく精神疾患の半分が鬱、故に鬱を見きわめるといことはとても

重要です。以上で《スクールカウンセラーの実践から》の不登校児童生徒への対応を終わります。

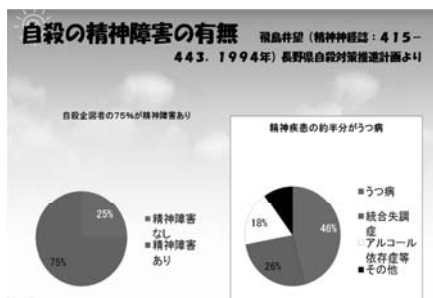
現在、大街道小学校では、家庭・教職員・カウンセラーが丸となって対応することができる状況になり、25年度不登校児5人の全員が元気に登校しています。

全校児童が心を開くことができ、信頼関係を築き、学校生活の中での様々な出来事（楽しいこと・悲しいこと・頑張ること・助け合うこと…）を乗り越えて行って欲しいと願います。

最後に、この苦しかった3年間、共に励みしながら、次々に押し寄せる予測に絶する困難を乗り越えてきた大街道小学校の児童・教職員・保護者の皆様の姿に勇気と人として大切な宝物を沢山頂きましたこと、協力を惜しまず応援して頂いた、松本大学の教職員・学生・家族に感謝して講演を終わりたいと思います。(S19)

S18

予防策～鬱から自殺へ移行しやすい(孤独死・自殺・PTSD・むきこもIefc.)
(①図:自殺企図者の75%が精神障害あり②図:精神疾患の約半数がうつ病)



S19

参考文献・資料その他

- ・長野県不登校対策検討委員会平成24年9月
『不登校対策の行動指針(改定版)』
～すべての児童生徒の笑顔で登校と社会的自立を目指して～
- ・兵庫県教育委員会 平成23年3月
～『災害を受けた子どもたちの心の理解とケア』～研修資料
- ・『阪神・淡路大震災と子どもの心身』～災害・トラウマ・ストレス
著者 服部祥子・山田富美雄 【名古屋大学出版会】
- ・『こころのケア』～阪神・淡路大震災から東北へ～
著者 加藤寛・最相葉月 【講談社現代新書】
- ・宮城県教育研究センター 教育相談研究グループ
- ・フロイトS. 1917 悲哀とメランコリー フロイト著作集 第6巻
井村恒郎他(訳)1975 人文書院 Pp.137-149.
- ・その他